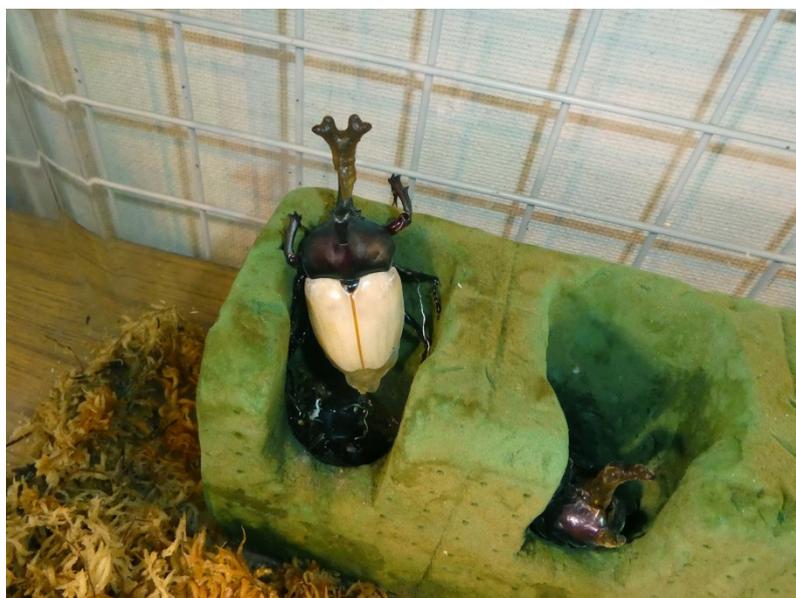


「生き虫ずかん」その後

7月23日(日)の「きょうだけ生き虫ずかん」の時に持って行って、子どもたちに触らせたカブトムシのさなぎについて、その後をお知らせします(安否が気になる人もいると思うので・・・)。

触れるようにしたさなぎは3匹(オス2匹、メス1匹)でした。そのうち、1匹のオスは人工蛹室で問題なく羽化に成功しました(写真)。もう1匹のオスは、羽化は成功しましたが、右の後翅の収納に失敗して出たままになりました。これは、触られたことよりも、人工蛹室の問題とされます(人工蛹室で羽化させると、時々あることなので)。メスは、体は完成したみたいでしたが、皮を脱ぐのがうまくいかず、体の大半が蛹の姿のまま成虫になりました。長く生きるのがむずかしい状態です。このパターンは初めてなので、触られた影響があったと思います。



無事に羽化したオス(7月29日)。背中はやがて黒くなる。

人工蛹室を使う、あるいは使わないことのメリットとデメリットを整理すると、つぎのようになります。

・人工蛹室を使わない

多くの本にあるように、土のなかでさなぎになっている時をたいせつに見守るようにすると、成虫の羽化が失敗するリスクは最少となります。そのかわり、「さなぎ」という劇的に体制が変化する段階を自分の目で見ることにはできません。

・人工蛹室に入れて見守る

土の中からさなぎを掘り出して人工蛹室に移す作業だけであれば、さなぎにはストレスにはなりません。ただ、人工蛹室はあくまでも擬似的なものなので、自然の蛹室にくらべれば羽化に失敗するリスクは高まります。前述の後翅が出たままになってしまったオスが、このケースです。そのかわり、さなぎ→成虫（早めに掘りだせば前蛹→さなぎも）の変化を時系列で追うことができます。後翅の収納失敗は人工蛹室の作り方で改善できるかもしれません。来年は改良型の人工蛹室でやってみようと思います。

・人工蛹室に入れ、さなぎにも触ってみる

わざわざ、さなぎに触らなくても・・・と思うかもしれませんが、さなぎを触る（持つ）ことで、その重みや質感、さらにさなぎが動くことを体感できます。小さな子どもたちだけでなく大人にとっても、ただ見るだけと実際に持ってみるのとでは、印象がぜんぜん違います。触る（持つ）ことで得る情報量は、格段に多いです。そのかわり、前述のメスのように羽化失敗のリスクは高くなります。

いずれにしても、カブトムシの幼虫を育てて成虫にすることは、身近に生き物の成長を観察できるので有意義だと思います。イネやネコ、魚にくらべると昆虫の成長は速く、しかも見た目に大きく変化するので「成長」ということを実感しやすいでしょう。

「生き虫ずかん」の時は、人工蛹室という観察方法をご提案した感じでした。ご家庭でどのように飼うかは、子どもたちの求めるものや気持ちに応じて選択すればいいと思います。年齢によっても、求めるものが変わると思います。「生き虫ずかん」当日は人工蛹室について詳しくお話する機会がありませんでしたので、ここで補足させてもらいました。